

# 新書紹介

## 都市——ローマ人はどのように都市をつくったか

デビッド・マコーレイ著

西川幸治訳

岩波書店

A4判 一二五頁 一、六〇〇円

イギリスを旅行中、ロンドン

から車で一時間ぐらいいったヨークという街でローマ時代に出会った。ヨーク・ミンスター寺院では教会の建物の一部を公開しながら街の歴史を説明している。まず、地下室でその土台をだれが作り、街の基盤がいつできあがったかを見せている。それがローマ時代にローマ人によって建てられたものだった。教会の地下室で土台の一部を目の前にして「ああ、これがヨーロッパなんだ」と長い歴史の空間を実感し、今も生き続けるローマ人の土木技術に驚嘆した。

改めてヨーロッパ都市の共通母体を確認させられた思いだっ

た。

ローマ人はギリシア人のような文学的独創性も、ヘブライ人のような深い宗教性も持たなかった。しかし、法律学、農業、工学技術などの実用面では古代知識を大成させた。特に工学技術に関しては真に天才であったと思う。

デビッド・マコーレイの「都市——ローマ人はどのように都市をつくったか——」は、こうしたローマ人の土木建築技術をドキュメントタッチで描いて都市計画の大事さを語っている本である。

内容はアウグストゥスの統治下紀元前二六年・北イタリアの

ポー河流域にウエルボニアという都市をつくる話である。ウエルボニアは実在の都市ではない。時代や地域を明示しているにもかかわらず、都市名に個人名詞を避けたのは、ここにローマ都市建設の典型を求めたためだろう。そこが読む側に想像力を生じさせるようでもある。

都市の建設は土地の選定から始まり、次に兵士と奴隷が来て堀をほり、技術者の測量や設計で基本計画ができあがる。人口を五万人と限定する。その人口が限界に達した時、都市を守るために建設された城壁が人口抑制の役割を果たすところで話は終る。

短い淡々とした説明であるが、わずらわしくなく理解しやすい。しかし、この本の圧巻は何といってもイラストである。作業に使われる道具や使用方法、水道橋や円形闘技場を、どのようにつくったかを非常に精密に描いている。

モノクロだが、それだけに細さに迫力がある。平面図や断面図も適当に組み入れられ、理解を助けてくれる。さらに、こ

では住む人々の生活も描かれている。住宅、商店、共同トイレ、娯楽施設等をつくるころは、ローマ人たちの毎日の暮しぶりが浮んでくるように楽しんでいる。

テルマエという浴場には、浴場や蒸気室だけでなく、体育場や図書館もそろっている。おしやべりをしたり、体を鍛えたり、本を読んだり、多くの市民が集まる施設である。

このテルマエには、工学技術の粋が集約されている。高水準の技術ですばらしい造形をつくりだし、それを市民に提供する。すばらしい事だと感心させられる。

あとがきで訳者の西川幸治が、都市で生きる私たちが考えなければいけない幾つかの点を指摘しているが、実用的で機能的な事柄に美的造形を結びつけた建築空間を市民に提供したことも、注目すべき点ではないだろうか。

ギリシャのカバラという街には、ローマ人の上水道橋がとてもよく残っていた。一六世紀まで使われていたという。ローマ

人の活躍した都市では同じように都市建設が進んだにちがいない。

岩波書店がシリーズで出したデビッド・マコーレイの訳本は、この「都市」の他に、既に「ピラミッド」・「カテドラル」・「キャッスル」が発行され、あと一冊「アングラウラウンド」で終る。イラストの迫力としては「カテドラル」が出色だが、市民生活と結びついた「都市」は最も親しみやすいものではないだろうか。

作者マコーレイは、建築を専攻したイラストレーターである。見る本であるが、かなり良質な楽しさを持った傑作であると思う。中・上級生用と示されている。成長期の子供たちにぜひ読ませたい本である。しかし、子ども向きにしてしまえばあまりにもおもしろい気がしてならない。

〈都市整備局新本牧開発室

岡田優子